# 総　説

## 1　沿革・地勢

昭和 29(1954)年 3 月、芦品郡府中町、岩谷村など周辺6カ町村が合併して市制を施行し、現在の府中市が誕生しました。その後、芦品郡河佐村、御調郡諸田村及び御調町三郎丸地区の一部を編入、また、昭和 50(1975)年に芦品郡協和村、平成 16(2004)年に甲奴郡上下町を編入合併し、現在の市域となっています。

本市は、広島県の東南部内陸地帯に位置し、面積の大半が山地で、三方を山で囲まれ盆地を形成し、西北部から東南部にかけて、県内三大河川の一つである芦田川が縦貫しています。その流域の両側には平野が広がり、美しい山並みを背景に、住宅、商店、工場などが立ち並び、市街地が展開されています。山系は、神石及び世羅方面から伸びた中国山脈の余脈で、標高 400m～770mに及ぶ小規模連山が市街地の西・南・北部を囲んでいます。

河川は、源を三原市大和町の渓谷に発し、世羅盆地を貫流し本市に流入、さらに福山市を経て瀬戸内海に注ぐ、芦田川水系と江の川水系に属しており、分水嶺の町として知られる上下町は、福山・三次両市の中間の高地で陰陽の分水界をかたち作っています。

市街地は、律令時代に備後国の国府が置かれ、約 500 年間にわたって備後地域の中心地として栄えた場所です。平成 28(2016)年には、備後国府跡が国史跡となり、今後の保存活用、史跡整備に向けて大きく動き出しました。また、幕府領として栄えた上下町の白壁の町並みや、石州街道なども貴重な歴史的遺産です。

府中市は田園都市として発足後、伝統産業の育成に努め「府中タンス」、「鋳造品」、「備後かすり」、「府中みそ」などは時代の変化に対応しながら地場産業として発達しました。「非鉄金属ダイカスト製品」、「建設・工作機械」、「施盤用チャック」などの近代産業はたゆまない企業努力により驚異的な発展を遂げ、“リョービ”、“北川鉄工所”、“ヤスハラケミカル”、“北川精機”は上場し、全国はもとより世界中に販路を拡大し、飛躍を続けています。

しかし、工業の順調な発展に伴い、市街地内の用地の狭さや公害問題などが生じてきました。そこで、住・工分離を図り快適な生活環境を確保するとともに、工業を一層発展させる目的で、昭和 50(1975)年に「本山工業団地」、平成 3(1991)年に「鵜飼工業団地」を造成しました。また、地場産業の高度化と人口の安住促進のため、平成 13(2001)年には「鵜飼工業団地」に隣接して「桜が丘団地」を造成し、分譲を進めています。

住宅・工業団地の造成によって生活環境や操業環境の向上が達成された半面、市街地の拡散や商業の撤退等による中心市街地の空洞化など、課題も残されました。そこで平成 19(2007)年、生活支援機能をコンパクトに集めて利便性を向上させるとともに、歩いて暮らせるまちの実現を目指した「府中市中心市街地活性化基本計画」の内閣総理大臣の認定を受け、「恋しき」の保存・再生や中心部を南北に貫く市道(府中お祭り通り)の拡幅など、課題解決に取り組みました。平成 25(2013)年には、「第二期府中市中心市街地活性化基本計画」の認定を受け、「恋しき」に隣接して地域交流センター、JR府中駅の南地区に道の駅等を整備するとともに各施設を結ぶ歩行者空間の整備を進めることで、まちなかの賑わい空間の形成に取り組んでいます。

近年では、府中市のソウルフードとして親しまれてきた「備後府中焼き」で地域活性化を目指そうと、市内外のお好み焼き店 38 店が加盟する「備後府中焼きを広める会」を結成、平成 22(2010)年に神奈川県厚木市で開催された第 5 回B-1 グランプリに初出場し、全国にその名を広めています。平成 26(2014)年には、「2014 関西・中国・四国 B-1 グランプリ in 府中」の開催地となり、市内外から多くの家族連れで賑わい、目的である地域活性化に大きく貢献しました。平成 27(2015)年にまちの目印・観光の道しるべとしてオープンした地域交流センター「キテラスふちゅう」にも、南館にお好み焼き店が構えられ、食資源である「備後府中焼き」の魅力を発信しています。

文化面では市立図書館が平成 4(1992)年に開館し、中心市街地の景観にマッチした外観で市民に親しまれています。さらに平成 16(2004)年に保健福祉総合センター「リ・フレ」が開館し、市民がより楽しく健康に暮らすため、

体力づくりと生きがいづくりができる交流館が誕生しました。また、市民の生涯にわたる学習活動を支援する拠点として平成 17(2005)年に生涯学習センター「TAMスクエア」が開館し、多くの市民に利用されています。

教育面では、平成 16(2004)年に「小中一貫教育」を導入し、平成 24(2012)年には「コミュニティ・スクール」に着手、加えて平成 27(2015)年から「グローバル・キャンプ」を実施するなど、市民に提供する「学び」を、時代の変化に先んじてダイナミックに対応させる改革を行ってきました。これらの基盤を整え、平成 29(2017)年、中国地方では初めての取組みとして、市内全ての小中学校を義務教育学校及び併設型小・中学校に移行するなど、子どもたちの 9 年間の「学び」に寄り添った教育を進めています。

子育て面では、病児保育、延長保育などを充実させるため、平成 21(2009)年に「広谷保育所」、平成 22(2010)年に「国府保育所」が子育て支援センターを併設して開所し、未就学児の子育て相談にも対応しています。また、平成 30(2018)年には「府中市こどもの国(ポムポム)」がリニューアルオープンし、児童館としての機能に加えて、児童の一時預かりを中心とした「子育て世代活動支援センター」、また「木育」(もくいく:木を子どもの頃から身近に使っていくことを通じて人と自然の関わりを主体的に考えるなど豊かな心を育てる)の推進施設として生まれかわりました。周りには桜づつみ、水辺のプラザ、ラジコンカーのサーキット場も整備されており、多くの市民の憩いの場となっています。

医療面では、平成 24(2012)年、市立府中北市民病院とJA府中総合病院(現府中市民病院)を経営統合し、両病院を運営するため地方独立行政法人府中市病院機構を設立しました。この 2 病院は、府中市が目指す医療を担う病院として、地域の医療体制の中核となる役割を果たしています。平成 27(2015)年には、府中市民病院の新病棟が完成し、翌年 2 月から診療が開始されました。

都市基盤の整備では、都市計画決定をした目崎出口線や府中南北道路(府中松永線・新山府中線)の整備が進められています。特に府中南北道路は、扇橋周辺の安全確保や渋滞解消のほか、山陽自動車道福山西ICとを連絡する主要幹線の機能を併せ持ち、工業団地とのアクセス機能向上の面からも早期完成が望まれています。

交通面では、平成 28(2016)年に供用開始した道の駅びんご府中を交通結節点と位置付け、市内循環バス、一部路線バス、高速バスの乗り入れを行いました。中心市街地と集落市街地とを公共交通で結ぶとともに、循環バスの乗り継ぎ等により、中心市街地に集約している生活支援機能の利便性の向上を目指しています。

## 2 位置

本市は、広島県の東南部内陸地帯に位置し、福山市へ 18.5km、三原市へ 40km、県北の中心都市・三次市へ 65kmの地点にあり、北緯 34 度 34 分 06 秒、東経 133 度 14 分 11 秒、海抜 27m(府中市役所)にあります。

市域は、東西 17.13km、南北 25.54km、面積 195.75 ㎢、東南は福山市、西は尾道市及び世羅郡世羅町、北は三次市、庄原市、及び神石郡神石高原町に隣接しています。

市街地を中心に主要な道路が東西南北へ放射状に走り、道路網を形成しています。国道 486 号、愛称「山陽ふるさと街道」が芦田川に並行して市街地を東西に貫通し、東は国道 182 号を経て山陽自動車道及び国道 2 号線に連結し、西は、尾道市において国道 184 号に結ばれています。北に延びる県道府中上下線は上下町において国道 432 号と接続し、中国自動車道及び山陰地方に通じています。平成 27(2015)年には尾道松江線が全線開通し、沿線地域への社会経済・生活文化の発展に寄与することが期待されています。南に向かい松永湾に通じる府中松永線などの県道は、近隣市町を結ぶ動脈となっています。

鉄道は、JR福塩線があり、通勤・通学などに利用され、古くから親しまれています。福塩線は、福山市で山陽新幹線・山陽本線と結ばれ、三次市において芸備線と連絡し陰陽連絡鉄道としての役割を果たしています。